④令和８年度　研究の視点

１　令和７年度の研究について

●令和７年度研修会主題：**「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」**
●研修会主題に迫るための視点

視点①：子どもが自ら問いを見いだし、主体的に学び続けることができる単元づくり

（吟味する点）　子ども一人ひとりのみとりを生かして行った手立てによって、どの子も主体的に学び続けている単元になっていたか。
（手立ての例）　教材吟味　単元構想図や資料計画　児童の実態把握　授業時間以外の対話　学びの価値付け　学習計画の修正　振り返りの分析　など
（検証方法の例）資料や発問の整理・分析　実際の流れの検証　注目児を２名程度設定し変容を検証　一人ひとりのふり返りから検証　など

視点②：個を生かし、協働的に学びを深めることができる授業づくり

（吟味する点）　①子どもたちの実態に沿い、問題意識のもとに成立した学習問題になっているか。また、その学習問題が協働的な学びを通して社会的事象の意味等に迫るものになっていたか。
②教師の指導性（手立て）は、浜小社研が育みたい資質・能力を育成するために有効であったか。
（手立ての例）　①教材研究・教材吟味　資料提示　板書　問い返し　発問
②座席表　資料提示　板書　問い返し　発問　振り返り　など
（検証方法の例）①前時や本時の授業記録分析　学習問題に対する子どもの考えのみとり　など
②実際の資料の検証　板書の検証　授業記録（児童の発言が分かるもの）の分析

成果

○単元づくりと授業づくりの二つの視点で実践・分析をすることで子どもの具体の姿から検証することができた。また、学年部会ごとに、目指す子どもの姿を明記するとともに、視点の中でも特に大切にしたいことを明確にすることで、各学年の実態に応じた研究を進めることができた。

【視点①】

○学習過程に焦点を当てて研究を進めてきたことによって、単元全体の学習過程の構成が浸透してきたことを感じる。特に、導入段階で子どもの問題意識を高める工夫（意外性のある事実、比較、体験、前単元とのつながり）から「単元を見通す学習問題」をつくることは手応えを感じる実践が多く見られた。
○注目児童を設定し、単元全体を通してその子の言動を分析していくことによって、注目児童の変容する姿をみとるとともに、子どもの姿から単元の学習過程の価値を検証することができた。

【視点②】

○どの学年部会も座席表等を活用して子どもをていねいにみとり、みとったことを生かして発問や意図的指名、資料提示のタイミングを吟味するなど、みとりを生かした指導性の発揮に努めていた。
○「なぜ・どうして」という文言ではなく、「どんな・どのように」という文言の「本気の学習問題」でも、子どもが意欲的に学び合い、社会的事象の意味に迫る姿が見られた。今後は「本気の学習問題」のあり方についてさらに見解を広げていく必要がある。

課題

●単元の追究過程（学習問題の成立や本時展開など）において、「子どもの思考」と「教師のねらいや目標」のどちらかに偏りすぎるのではなく、子どもに寄り添いながら「子どもと教師が共につくる」ことを大切にしていきたい。また、そのためにはどのような教師の指導性のあり方が有効なのかを探っていくことが必要である。

【視点①】

●教師がこの単元でどのようなことをねらうのか理解することや、取り上げる教材がもつ魅力や価値、問題性などをしっかりと吟味できていないと、単元の目標に迫ることが難しいと感じた。
●「本気の学習問題」の成立過程では、子どもの問題意識と教師のねらいが無理なくつながるような成立を目指したい。その際、「本気の学習問題」が単元のねらいや社会的事象の意味等に迫っていくものとなっているのか吟味していく必要がある。

【視点②】

●授業（本時）において、どのような子どもの姿が見られると学びが深まった姿と言えるのか、教師が具体的にイメージして臨む必要がある。また、実際の授業の中では、学びを深めるためにどの子どもの考えをどのように生かしていくのか教師の指導性のあり方を探っていく。
●子どもの思考の流れに沿うのではなく、教師のねらいや目標へと引っ張りすぎてしまう場面が見られた。今後は学びを深めるために有効な指導性について吟味していくことが必要である。

２　令和８年度の研究について

研究主題
よりよい社会のあり方をともに問い続ける社会科教育

横浜市小学校社会科研究会で目指したい子ども像

●社会的な見方・考え方を働かせながら、社会的事象の見事さや問題点等に気付き、様々な人の立場に立って物事を多面的に理解したり考えたりする子

●事実をじっくり見る中で見いだした社会的な課題や問題を自分ごととしてとらえ、学んだことや生活経験等を生かしてよりよい解決策を考えたり自らの在り方や行動）を選択・判断したりする子

●問題解決に主体的に粘り強く取り組むことを通して、自分が住む地域（市町村・神奈川県・日本）のよさに改めて気付き、地域の一員であることに愛着と誇りをもつ子

研究副主題
人の営みを自分とのかかわりで捉えて、
対話を通して学びを深める授業づくり

研究の視点②
子どもが問いを見いだし、
主体的に学び続ける単元づくり

子どもが主体的に学び続けるためには、子どもの問題意識をもとに追究意欲を引き出すことが大切である。そのために、これまでの研究をふまえ、単元を見通す学習問題をつくることや、予想や見通しを生かして学習計画を立てられるようにするとともに、社会的事象の意味や本質に迫る学習問題をつくり、単元全体を通して学びを深めていくことを目指していく。大事なことは、計画通りに進めるのではなく、子どものみとりをもとに、当初の計画を修正しながら子どもと教師で共に単元づくりをしていくことである。

研究の視点③
対話を通して学びの深まりを
実感できる授業づくり

学びの深まりを実感するためには、授業の中で対話を通して自分の考えを深めるとともに、自らの学びを振り返り、自分の考えの変容に気付いていくことが大切である。そのために、社会的事象の意味や本質に迫る学習問題の成立過程や、対話を通して考えを深めるための教師の指導性のあり方（個のみとり、板書、指名、発問、資料提示等）を模索していく。さらに、追究過程の中で子ども一人ひとりの考えの変容をみとり、価値付けたり、次の学びにつなげたりしていくことも大切にしていく。

研究の視点①
子どものみとりと教師の願いを大切にした教材研究

学習指導要領をもとに単元の目標や学習内容を教師が明確に捉えることが大切である。その上で、学級の子どものみとりをもとに、この単元、この教材を通して子どもたちにどのように学びを深めてほしいのか、どのような姿になってほしいのかという教師の願いや意図を大切にした教材研究を行っていく。

【研究の視点において大切にしたいこと】

研究の視点①　子どものみとりと教師の願いを大切にした教材研究

・学習指導要領を読み込む

学習指導要領をもとに、実践する単元の『目標』や『内容』をしっかりと捉える。そこで示されている「～が分かる」「～を考える」とはどういうことか、何が分かればいいのか、どんな資質・能力を育めばいいのかを具体的に考える。

・教材を選定する

単元目標の理解と学級の子どもたちや注目したい子どものみとりをもとに教材を選定する。その教材を取り上げることによって単元目標に迫ることができるのか、そして意外性や矛盾点など子どもが問題意識をもって追究できるものであるかなど、子どもの生活との関連を探りながら吟味する。

・教師の具体的な願いや意図をもつ

単元目標に迫っていくことを前提にしつつ、さらにこの単元や取り上げる教材を通して、学級の子どもたちや注目したい子どもにどのように学びを深めてほしいのか、どのような姿になってほしいのか、単元設定における教師の具体的な願いや意図をもつ。

研究の視点②　子どもが問いを見いだし、主体的に学び続ける単元づくり

・指導計画を構想する

選定した教材をもとに、学級の子どもたちがもちそうな問題意識や問いなどを想定し、単元目標と教師の願いや意図を意識しながら子どもが主体的に追究できるような指導計画を構想する。また、実際の追究過程においては、子どものみとりをもとに、当初の指導計画の修正を柔軟に行う。

・事実を確かに捉えるための学習活動の充実を図る

子どもが問いを見いだすためには、事実をしっかりと捉えることが大切である。そのために、調べ学習や見学、資料の読み取りなどの活動を単元または授業の中に位置付け、子どもが事実をもとに問いを見いだしたり、考えをもったりできるようにする。

・単元を見通す学習問題をつくる

単元の導入段階では、子どもにとって魅力のある教材との出合いや学習活動（比較、体験、前単元とのつながり等）にすることで、追究意欲を高めるとともに、単元を見通す学習問題の成立を目指していく。そのために、何を事実（資料）として、どのように出合う展開とするのかを考える。

・社会的事象の意味や本質に迫る学習問題をつくる

授業の中で対話的な学びを通して社会的事象の意味や本質に迫る学習問題を子どもと一緒につくりだしていく。その際、子どもの問題意識をもとに切実に追究したい学級の学習問題として成立しているかどうかを吟味する。

研究の視点③　対話を通して学びの深まりを実感できる授業づくり

・資料提示の目的や内容を吟味する

「この資料で子どもたちにどんなことを掴んでほしいのか、そのための資料になっているのか」といった資料提示の目的と内容を吟味していく。

・考えを深めるための教師の指導性のあり方を工夫する

対話を通して学びを深めていくために、板書や指名、資料の数や提示のタイミング等の教師の指導性のあり方を工夫していく。その授業における目標や意図を明確にもちつつ、子どもの考えをどのように生かして深めていくのか、子どもに寄り添いながら指導性を発揮する。

・子どもの考えをみとり、価値付ける

子どもたちは対話を通して自分とは違う他者の考えに出合い、自分の考えを確かなものとしたり揺らいだりしながら、自分の考えを深めていく。そのため、教師が子どもの考えをみとり、考えの深まりや変容を価値付けたり、次の学習や単元へと生かしたりしていくことを大切にする。